

三種悉地法と三身真言

水 上 文 義

天台密教は延暦二十三年（四年の最澄の入唐求法の折に、越州龍興寺の順晄から、アバンランカンケン^二上品悉地、アビラウンケン^二中品悉地、アラハンヤナ^二下品悉地の、いわゆる三部三昧耶の密教を相伝したのを嚆矢とする。そして、その相伝は現存する印信やその写本類から、最澄―広智―徳円―円珍―遍昭と伝えられたことが確認でき、また最澄―円仁―安慧―遍昭という相伝も推定³できる。しかし、この真言は、円珍が入唐求法の折にさらに青龍寺法全から、法・報・応の三身真言として相伝されたのであり、ここに三部三昧耶の密教に新たな相承が加えられ、それはさらに台密史上の伝承に新展開を示したのである。

さて、この真言の相伝について、円珍は決示三種悉地法に次のように述べる。「唐貞元末年、順晄阿闍梨、付^二囑比叡山大師^一文云……（三種悉地真言）……大唐東都、水南天宮寺、

門樓柱上題云、法身真言、阿鑿囉哈欠、報身真言、阿尾羅吽欠、化身真言、阿羅波灑娜、大日經悉地出現品云、南麼三曼陀沒駄喃阿尾羅吽欠、……持誦法則品云、阿鑿囉哈欠、……文殊師利五字真言經一卷、此即第三化身真言也。青龍寺全阿闍梨、分^二付円珍^一雜真言云、多宝茨志於三十万字毘盧遮那金剛頂經^二採^二集要妙^一最上勝殊福田唯五字真言。……五字真言曰、阿鑿囉哈欠……全大和尚面決云、此法身真言也。其二仏者、全身在^二阿闍梨諸經中^一。故此不^レ出可^レ自知^一也。上來円珍所^二見聞^一矣。仁忠^一作^二大阿闍梨隨身秘書中^一、別有^二一本要抄^一云、五部卷帙貝多梵筭三十万言、出^二毘盧遮那金剛頂經^一、採^二集要妙^一、最上福田唯此五字真言。誦者所^レ獲功德不^レ可^二比量^一。……此事略載^二貞觀十三年阿闍梨官牒中^一、……或有^二三種悉地法一卷^一……未^レ見^二詛人^一其趣異^レ今^一。」とて、最澄所伝のと同じ真言を挙げて法全の口伝を載せ、また仁忠阿闍梨の秘書を引いて、この相伝の経緯は貞元十三年の官牒に記したとし、また今とは異なる趣旨の詛人未見の三種悉地法があるともいって

いる。

次に大悲藏瑜伽記、卷下の大牟尼会には、三身說法印の印相を応・報・法の順に示して「師曰、初為説_レ金剛部法_一時說法之印_、^{此三身悉先}次名_下説_レ蓮華菩薩部法_一時之印_、^{此土乎}後名_下説_レ三身部法_一時之印也。……三身說法之印、即是説_レ三部法之印也。受_レ三身此印者我國幾何也。唯除_レ叡山_一、^{未_レ有_レ之}。但座主義真之徒、宗叡先受_レ三身我本_一、自余不_レ有。而除_レ彼印_一外別有_レ三身法印_一者、古先阿闍梨墮_レ三身法罪_一歟。」とて、師の口伝には法身印が仏部、報身印が蓮華部、応身印が金剛部として、その細注に「此の三身、恐らくは先に此土に伝わるか」という。注が円珍のものであれば「此土」は日本を指し、「先に伝わるか」とは最澄所伝の三身真言であるとして、この印を学ぶ者は日本にどれくらいあるかと設問して、叡山以外に未伝であるが、かつて円珍が宗叡に授けたという。しかし、その印の他に伝法印があるというのは、古先の阿闍梨は慳法の罪に墮ちたか、ともいう。

この中で、決示三種悉地法については、当然いわゆる三本の破地獄系儀軌との関連が考えられるが、ここでの法全の口決は大略は儀軌に似ているものの細かい表現は異なる。一方、仁忠の秘書というものは、「三十万言の要抄」が儀軌には「四十万言」となるものの、かなり近しい表現ではある。同様のことは、教示両部秘要義と三種悉地軌についてもいえる

のであるが、こうしてみると、円珍はあるいは破地獄系儀軌の三種悉地軌は見_ていた_二可能性もあるかもしれない。とはいえ、疑問や些々疑文では円珍はこの三身言の出典を探っており、そこには洛陽天宮寺で見た真言として三身言を扱っているの、あるいは法全の口決や仁忠の秘書を出すことも併せ考えれば、まとまった形での儀軌を見ていなかったのかもしれない。

また、大悲藏瑜伽記では三身說法印が最澄所伝の密教と同じようだが、同時に他の伝法印があるともいい、「古先の阿闍梨は慳法の罪に墮すか」ともいうから、この時点で三身說法印が、必ずしも完成されたものではなかったことも考えられるのである。

二

さて、円珍が三身真言を受法した経緯について、安然の胎藏大法対受記卷六の無所不至印には「然伝法阿闍梨位印諸師不_レ同。高野和上用_レ無所不至印_一、……慈覚大師入唐廻日、池辺三君問云、灌頂有_レ幾。意云。受_レ三大灌頂_一時、已得_レ無所不至印_一為_レ阿闍梨、此外若更有耶。……然実大師亦用_レ無所不至印_一也。後珍和上入唐廻来加_レ釈迦三身印_一也。……讚岐守説、昔正僧正入唐廻日語云、别有_レ三身法阿闍梨位之印_一似_レ四智讚之印_一と、従来の胎藏伝法印は無所不至印であるが、円珍

は唐でこれに釈迦三身印を加える相伝を受け、また法全の下で円珍と同門といふべき宗叡は四智讚に似た印を伝法印とするという。同様の記述は金剛界大法対受記巻七の正念誦法にも見え、そこでは安然是金剛界大法対受記巻七の正念誦法に真言と同一視しているが、やはり円珍と宗叡の相伝は相異したというのである。従つて、法全からの相伝としては円珍が伝えた最澄所伝の三真言と同じ三身真言の伝承と、宗叡の相伝による四智讚の印に似た印という二系統の伝法印が考えられることになる。

三

さて、ここで宗叡の伝承した、四智讚に似た印についての委細は不明であるが、ただ関連があるかと考えられるのは、胎藏念誦儀軌類の中で法全撰と伝えられる青龍寺儀軌にのみ法報応の三身讚が挙げられることである。

青龍寺儀軌の三身讚は玄法師儀軌の讚王に相当する部分に出され「次以三清雅音、讚弘功德海、法身法界体、諸仏功德海、心以三清雅音」歌詠、而讚曰、薩嚩尾也二合比婆去囉訖囉二合訖哩三合也一切善素藥哆地引鉢帝爾而以無礙妙用体恒嚩二合駄觀二合迦摩訶囉引左三界如大尾嚩左曩、曩謨引娑視二合諦頂照我。成就菩提報身讚曰、阿難多摩引畢跢引娑盧上娜者藍引……金剛引身讚曰、嚩每迦旨囉娑跢擗曩頓素多曩娑恒三合……」という三種の梵語讚

である。胎藏法の讚は、通常は大日経巻七に挙げられる、いわゆるアリシャ偈の梵讚が玄法師儀軌に讚王として示され、それを大讚として伝承する。従つて青龍寺儀軌の三身讚は、大讚とは別の伝承といふべきであるが、宗叡の伝承が四智讚印に似ているというのと、どう関連するのであろうか。

台密の胎藏法における讚の伝承としては、まず円仁という胎藏界虚心記には「文の如し」とあるのみなので、ここでいう文が伝承通りに玄法師儀軌を指すなら虚心記は大讚を伝承していたことになる。次に安然の胎藏大法対受記巻三の大悲曼荼羅讚王印には「海大徳説用三普印、……別記云大讚金剛私云、見大和上見行之法」唯用三大日小讚。其小讚本但是口伝、未見三経文。然玄法師爛脱同卷儀軌此小讚又其大讚出三大日経第七巻中及金剛頂四巻六巻本、……慈覚大師伝、其詠曲。又於三小讚亦有三慈覚大師及珍和上竝正僧正三家詠曲。讚岐守説慈覚大師此処伝三大日小讚也。但珍和上以三此小讚為三法身讚、更加三報身三身二讚、伝三三身讚、並有三曲調云々。正僧正説、用三法身讚、或四智讚、或吉慶讚、随用三其一。」とあつて、円仁は大讚を伝承しているが、一方小讚は経文に典拠が無く口伝であるものの、円仁、円珍、宗叡の三人がそれぞれに伝承している。しかし円珍は小讚を法身讚として他に報身讚と心身讚も加えた三身讚を伝承し、宗叡は法身讚、四智讚、吉慶讚のいずれか一つを用いるという。同様の伝承は金剛界

大法対受記卷六の随方供養にも「若高野説、十六讚中四方各初一段及加大日小讚、為三方讚。若睿山説、大日小讚是法身讚。更加報応二身二讚、為三身讚、加四智讚、為三方讚。」とある。この中で大讚はアリシヤ偈であるが、大日小讚が法身讚のことで、円珍は三身讚を伝えるというのだから、青龍寺儀軌と円珍の伝承は符合することになる。ちなみに、大日小讚すなわち青龍寺儀軌の法身讚は、今日の台密では曼供法要などには使われないが、灌頂音用の天台声明では心略梵語讚として伝承³されている。

ともあれ、三種悉地真言を三身真言として伝承した円珍が青龍寺儀軌にのみ見える三身讚も伝承し、また同じ法全から四智讚印に似た伝法印を伝承した宗叡が、法身讚、四智讚、吉慶讚のいずれか一つを用いるというのは、三身真言における各々の伝承の相違とも考え合わせれば、そこに法全による何らかに伝承が加えられていたことは推測できよう。従って最澄所伝の三真言が円珍の頃に三身真言とされたことについては、法全等の晩唐の密教諸師の伝承や、中唐く晩唐の密教思想の反映が背景として考えられることにもなる。

四

ここで想起されることは、中唐く晩唐の密教においては三身の具足・成就が説かれる場合のあることで、それは破地獄

系儀軌やいわゆる毘盧遮那別行經などに顕著なのであるが、時代的にはそれらに先行すると考えられる般若記の經典にも注目すべきであろう。

それは、金剛頂經の異訳ともいわれる諸仏境界撰真實經卷中の金剛界大道場品之余には「復次瑜伽行者、次觀三方諸仏菩薩及其眷屬入自身中。如諸化仏告菩薩言、善男子有同三世諸仏真言曰、唵野他薩嚩嚩怛他藥多娑怛他吽……又作此想、三身妙果並三真實、我身之中皆得圓滿……願垂加護令証法身。復次瑜伽行者、作報身觀、如諸化仏告菩薩言、善男子有報身真言曰、唵娑嚩娑嚩成度憾……次瑜伽行者、作化身觀、如諸化仏告菩薩言、善男子有化身真言曰、唵薩嚩嚩娑謨吽……」と、それまでの金剛頂經には見られなかった三身觀の真言と三身成就が説かれているのであり、また同じく守護國界主陀羅尼經卷九の陀羅尼功德軌儀品には「唵字所以者何。三字和合為唵字故、謂𑖀𑖔𑖧𑖪𑖩𑖔𑖧。一𑖀𑖔𑖧𑖪𑖩𑖔𑖧者、是菩提心義、……又法身義。二𑖀𑖔𑖧𑖪𑖩𑖔𑖧字者即報身義、三𑖀𑖔𑖧𑖪𑖩𑖔𑖧字者是化身義。以合三字、共為唵字、撰義無辺故為一切陀羅尼首。」とて、マン字をア・ウ・マの三字の合成として、そこに法報応三身の義が具されて一切陀羅尼の首となるのである。

これらから、中唐く晩唐に至る唐の密教思想の中に三身の具足・成就を説く傾向が出てきたことは看取できるのであ

り、それがやがて青龍寺儀軌の三身讚や破地獄系三種悉地儀軌、毘盧遮那別行經などでの三身成就や三身尊崇へと連なっていたことが想定できるのではなからうか。むろん、それが単純に三身真言と結び付くものではないかもしれないが、その成立の背景としては考えられなければならない問題である。

最澄が三真言を相伝した頃は般若訳の經典も訳出されたばかりで、まだそうした傾向が顕著ではなかったにせよ、円珍や宗叡の渡唐の頃には三身成就などが広く説かれる機運が漸く隆盛になってきていたとすれば、円珍の三身真言の伝承もそうした唐代密教の流れの中で位置付けられることとなり、それはまた三身即一論に立つ台密の中で、安然などによってまた新たな展開をとげることにもなったのではなからうか。

- 1 これらの問題については、拙稿「台密における三種悉地法の伝承」天台学报三十号に少しくふれた。天台叢標や円仁の伝記類、その他の史伝資料による。
- 2 円珍が相伝当時に、破地獄系三種悉地軌のいずれかを見ていたという確証はなく、あるいは手文の類を見たのかもしれない。ただ、儀軌に「此本五部梵本四十万言出、毘盧遮那經金剛頂經採集要妙最上福田、唯此五字真言誦者、所獲功德不可比量不可思議不可説也。」(大正一八、九一〇b~九一一a)とあるのは決示三種悉地法の仁忠秘書とはば一致するし、同じく「此三三即十五字即十五種金剛三昧、一字即五字五字即一字、逆順旋轉初後不二。」とあるのは教示兩部秘要義と一

三種悉地法と三身真言(水 上)

致する。これは三種悉地破地獄軌の文なので、あるいはこれを見ていた可能性もある。

- 3 智証大師全集、一〇三三及び一〇三九。ここでは円珍は三真言の出典や趣旨についての疑問を出している。

4 大正七五・一八九a~c。

- 5 この問題については、安然の記述ではさらに湛契を中心とする別の伝承もあったようにも読める。細かくは伝承する印相等を比較して、それぞれの系統を明瞭にする必要があるかと考える。

- 6 これについては、学会開催日の約一ヶ月前、六十三年六月に刊行された三崎良周博士の「台密の研究」の「胎藏界の念誦儀軌と曼荼羅」の章で、同様の観点から青龍寺儀軌の三身讚について注目しておられる。

- 7 叡山学院の天納伝中教授のご教示による。なお、天台声明大全(キング・レコード)に載る多紀道忍師口伝の朱入り六巻帖には、心略讚は大日小讚または法身讚と称することが明記されている。

- 8 安然は、円珍所伝の三身真言「三身説法印が胎藏界系の伝承であるとして、これに対する金剛界系の三身真言として撰真実經の「ランヤタサルバタダギヤタサタタウン・ランソバハバンエドカン・ランソロボソモウン」の三身真言を対置させるのである。拙稿「台密における撰真実経」多田厚隆教授頌寿記念論文集「近刊予定」。また円珍における台密の三身即一論については、特に菩提場経略義釈において一字金輪真言ポロの解釈をめぐって顕著な展開がみられる。これについては拙稿「智証大師円珍の仏身論」智証大師研究「近刊予定」に少しくふれた。

△キーワード▽ 天台密教、三種悉地法、三身真言、唐代密教

(叡山学院講師)